シーメンス事件と山本権兵衛内閣

平成15年2月27日・薬円台公民館

低迷する景気に、先行きの見えない改革。今年こそ何とかいい年であってほしいと思いますが、実はちょうど九十年前、やはり「行財政整理」と「構造改革」が歴代内閣最大の政治課題になっている時、これを見事に断行した総理大臣がいるのです。それも首相就任後わずか四か月でやってのけたのです。先月お話した大正政変の直後、大正二年二月に首相となった薩摩出身、海軍大将の山本権兵衛です。役人の数を六千八百七十八人減らし、臨時職員まで入れると実に一万人です。これによる経費節減六千六百万円、いま六千六百万なんて云っても少しも驚きませんが、その年の歳出が六億円ですから、その十一%という大変大きなものでした。こんなに短い期間でこれだけの仕事をした総理大臣は、そうはいないでしょう。

しかしその山本内閣も、シーメンス事件と云う、突然降って湧いたような海軍の軍艦建造をめぐる汚職事件で、一年一か月で総辞職に追い込まれてしまいました。山本は関東大震災の直後に再び首相になりましたが、今度は虎ノ門事件、無政府主義者の難波大助が摂政の宮だった昭和天皇を狙撃した事件で、またも短命内閣に終わりました。山本は、首相としてはまさに「悲運の宰相」でした。歴史に「もしも」はないと云われますが、もし最初の山本政権がもう少し続いていたら、日本のその後の進路もあるいは変わっていたのではないか。そう思うほど、山本権兵衛は大きな存在でした。明治から大正にかけて山県有朋、桂太郎といった長州閥に対抗出来た、数少ない政治家の一人だったと云っていいでしょう。桂は山県に可愛がられ、人をそらさない政治手腕で三度首相になっています。常に山県をバックにして、その路線を歩んでいればよかったのですが、山本の場合はむしろ山県と対抗して、海軍を陸軍と同等の地位に引き上げました。文字通り日本海軍「育ての親」であり、剛腹さと突進力で「山本なら」といった期待感を持たせる人でした。

山本は、薩摩からは松方正義内閣以来十五年ぶり、海軍からは初めての首相でしたが、この山本内閣誕生の引き金になったのが大正政変です。簡単におさらいしますと、大正元年十二月からわずか二か月余りの間に、二つの内閣が倒れてしまいました。まず政友会の西園寺公望内閣ですが、陸軍はロシアに備えるのだと云って、二個師団、約五万人の兵力増強を強硬に要求してきました。日露戦争に勝ったとはいえ、日本は外国から莫大な借金をしています。財政上とても無理だ

とはねつけると、陸軍大臣が辞職してしまったのです。「陸海軍大臣現役武官制」つまり「陸海軍大臣は現役の大将、中将に限る」という規定を盾にとって、陸軍が内閣を倒した最初の例となりました。代わった第三次桂太郎内閣も、「憲政擁護・閥族打破」の国民の大合唱に五十日余りで崩壊しました。閥族というのは、師団増設要求をゴリ押しして、西園寺内閣を倒した長州閥と陸軍のことです。内大臣兼侍従長として宮中にいた桂が首相になり、事あるごとに天皇の詔勅を利用したのでは、憲法に基づいた政治が出来ない。「立憲政治を守れ」と新聞や政党が先頭に立ち、こちらは世論、民衆の力が内閣を倒した最初の例です。

これが大正政変ですが、こうまで長州と陸軍が憎まれていては、さすがの山県も自分の所からは首相を出せません。元老会議で西園寺の推薦もあって、これまで何度か候補に上がっていた山本権兵衛内閣となったのです。ところが護憲運動最大の目標は「政党内閣」の実現でした。それなのに直前まで政友会総裁をしていた西園寺が、薩摩閥であり、海軍の山本を推したのは何故だったのでしょうか。第三代政友会総裁になった原敬を首相にするには、まだまだ元老たちの反対が強すぎました。と云って、ぐずぐずしていては、桂という頭を代えただけの、長州閥と官僚の内閣になってしまいます。西園寺は、政友会の政策実現に山本の実行力、突進力に期待をかけたのです。山本としても政権を引き受けるからには、議会第一党である政友会の支持、とりわけ力のある原敬の入閣は絶対条件でした。

しかし「閥族打破」をスローガンにしてきた政友会が、薩摩とはいえ同じ閥族の山本と組むということは、火中の栗を拾うようなものなのです。果たして党内からは反対論が続出しましたが、原敬がそれを押し切って全面協力を約束し、自ら内務大臣、副総理格で入閣したのも、山本の力で実質的に政党内閣に持っていけばよい。そういった原らしい、現実的な読みからでした。事実山本内閣は、大蔵大臣の高橋是清ら三人が政友会に入党し、結果的には、首相と外相、陸海軍大臣以外は全て政友会党員という、歴代内閣では最も政党内閣に近い形になったのです。

それでも政友会は分裂しました。反対の急先鋒は、護憲運動で「憲政の神様」と云われるようになった尾崎行雄です。尾崎は云っています。「護憲運動の精神は閥族を打破し、日本人なら誰でも対等にすることだ。それが薩摩というだけで、同じ閥族の山本を助けるとは何事だ」。尾崎や岡崎邦輔、外交評論家として活躍していらっしゃる岡崎久彦さんのお祖父さんですが、二十四人が脱党して政友会は議会の過半数を割ってしまったのです。大正二年度予算もたった五票差、かろうじて議会を通過したほど、山本内閣発足早々のピンチでした。しかし原敬という人は、こういう時に強いのです。どんなに理想論を云っていたって、野党では何も出来ない。本音は政権にありついていたいのだ。原はそうした政党人心理を巧みに衝いて、脱党者を切り崩していきました。岡崎自身「いやで別れたのでは

ない。亭主がちょっとだらしないから、改心させるために脱党したのだ」。ごう云っているように、山本内閣が実績をあげて行くと共に続々と復党し、政友会は再び二百三議席、野党より二十六議席も多い絶対過半数を確保したのです。

大正二年七月の末、東京商業会議所は山本首相以下閣僚全員を午餐会に招待して、会頭の中野武営はこう演説しました。「昔から云うは易し、行なうは難しと申します。どの内閣も整理の必要は認め、これを口にしましたが、実行出来ませんでした。ところが閣下は断固として実行され、吾人のすこぶる痛快に感ずるところ」と最大級の賛辞を贈ったのです。辛口の評論で知られる雑誌「日本及日本人」も「近来出色の内閣として注目に値する」と書き、「さすが権兵衛」の声は日増しに高くなっていきました。十一月十日には、大正天皇をお迎えして東京湾で海軍の観艦式が行なわれましたが、一きわ注目を集めたのが最新鋭巡洋戦艦金剛の雄姿です。日本海軍が外国に発注した最後の軍艦で、イギリスで建造され南アフリカの喜望峰を回って日本に着いたばかりでした。その十四インチ砲八門は、まだ世界のどの海軍も持っていない一番大きな大砲であり、海軍出身の山本の長期安定政権を象徴しているかのようでした。

年が明けて大正三年一月二十一日、議会で朗々と施政方針演説をする山本を、時事新報の記者前田蓮山は「猛虎一声山谷震う」、虎が一声吠えて山や谷が震えたと書いています。山本は自信満々でした。ところがその深夜、海の向こうから届いた一通の海外電報が、この山本内閣の死命を制することになったのです。戦後最大の疑獄事件であるロッキード事件も、外国からのニュースがきっかけでした。昭和五十一年二月、アメリカの議会でロッキード社の違法な政治献金が暴露されたのです。それからの一年間というものは、五億円を収賄した田中角栄元首相の逮捕など、日本中がロッキードに明けロッキードに暮れた一年でした。「大正のロッキード事件」と云われるシーメンス事件もまた、ロイター通信のロンドン特電が始まりだったのです。

一月二十三日付の新聞各紙は一斉に、「シーメンス会社の贈賄事件、日本将校に贈賄」と大々的に報道しました。シーメンスはドイツ最大の重電機メーカー。明治三十年から無線電信機や発電機など、日本海軍の注文をほとんど一手に引き受けていました。そのシーメンス東京支店のリヒテルという男のタイピストが、会社の秘密書類を盗み出してシーメンス本社をゆすって捕まり、ベルリンの法廷で懲役二年の判決を受けた。その際リヒテルは、シーメンスが日本海軍の高官に多額の賄賂を贈っていると証言した。これがロイターの伝えたニュースでした。

中でもロイターと独占契約を結んでいる時事新報には、シーメンス本社と東京支店とのやりとり、法廷で明らかにされた連絡文書の内容が詳細に載っていたのです。そこには日本の海軍将校の名前が生々しく出てきます。例えばこうです。

「沢崎と結んだコミッション契約は支障なく行なわれているのに、ロンドンの藤

井提督と新しい契約をするのは罪悪だ。軍艦一隻につき五%、他の海軍用品に二・五%。こんな高額な契約を藤井と結ぶ理由がどこにあるのか」。該当する海軍の将校はいました。沢崎は軍艦の建造を担当する艦政本部の沢崎猛寛大佐、藤井提督は艦政本部第一部長の藤井光五郎少将です。この文書の通りだとすれば、イギリスで建造中の軍艦、つまり前年日本にやってきたばかりの巡洋戦艦金剛にシーメンスの部品を取り付けた際、ロンドンに出張中の藤井が新たに法外なコミッションを要求したことになります。「シーメンスのために働かない軍人は免職にせよ」といった文書もあり、シーメンスがコミッションで、日本海軍を思うがままに動かしている実情が書いてあったのです。

この新聞報道に躍り上がったのが、野党と長州閥、そして陸軍です。とにかく尾崎行雄でさえ、「山本内閣は従来の内閣の中では、一番自分の主張に近いことを実行している」。こう認めるほど山本内閣は成果を上げており、攻めあぐねていたのです。そこへ山本のお膝元、海軍の収賄疑惑です。しかも議会では、海軍の拡張予算一億五千四百万円を審議中でした。二十三日の衆議院の予算総会、現在の予算委員会ですが、真っ先にこの問題を取り上げたのが、野党・立憲同志会の島田三郎です。島田は横浜毎日新聞社長を務めるクリスチャンで、雄弁家として知られていましたが、右手に持った時事新報で机を叩きながら、「日本海軍の威信に関わる。海軍はいかなる手段をとって、新聞が報ずるところは無実なりと天下に表明する積もりか」と迫ったのです。

海軍大臣の斎藤實、後に首相となり二・二六事件で暗殺される斎藤は、冷静な調子で答弁しました。二か月ほど前にシーメンスの東京支配人ヘルマンがやってきて、「会社の秘密書類が盗まれ、それがある外国通信員の手に渡って、その通信員から脅迫されている」。ヘルマンは「書類には日本の海軍士官の名前が載っている」と云ったが、斎藤は「海軍に間違った者はいないから、新聞記事になっても一向に差し支えない」と突っぱねた。そして直ちに警視庁、司法省に連絡したが、十日ほどしてヘルマンから警視庁に、「この間のことは何かの間違いで、無事に納まった」と連絡があった。斎藤は「以上の経過からもお分かりの通り、海軍には関係ないことであり、収賄をするような者は存在しない」と、真っ向から疑惑を否定したのです。

しかし斎藤は二か月前には、海軍の周りにおかしな話が起きていることは知っていたわけです。なぜその時、徹底調査を指示しなかったのか。当時検事総長だった平沼騏一郎は、回顧録に「斎藤自身も賄賂を貰っていたのだ」と書いています。平沼は後に首相となった右翼の大立者ですが、何でも誇張して話をするクセがあり、果たして本当かどうかは分かりません。ただ海軍首脳部に、出来れば臭い物にフタをしたい、頬冠りしたいといった気持ちが強かったことは確かです。もし海軍がこの時進んで疑惑を解明し、率直に国民に詫びていたら、勿論非難は

されたでしょうが、山本内閣総辞職まではいかなったように思います。海軍省人事局長だった鈴木貫太郎、終戦を決めた総理大臣ですが、鈴木も「こうした時はこちらから先手を打って人心の転向を図るべきだった。時期を失して、世論ごうごうと沸騰したのは誠に残念だった」と話しています。どうも、この組織に具合の悪いことは隠すと云った体質は、日本の社会に染み付いてしまっているんでしょうか。外務省や警察といった官僚組織だけではなく、雪印や日本ハムの不祥事なんかを見ても、少しも変わっていません。相も変わらず、同じ過ちを繰り返しています。

実は長州閥の総帥山県有朋も、この話を知っていたのです。一年ちょっと前、桂内閣が「憲政擁護・閥族打破」の総攻撃にさらされている頃です。築地の花街で、毎晩のように派手に札ビラを切っている男がいました。警視庁の刑事が内偵を進めると、シーメンスの倉庫係で、リヒテルと一緒に倉庫の品を横流しした金だと云います。リヒテルは海軍高官の名前が書かれた機密書類を持っていて、彼と組んでいれば怖い者なしだと云うのです。その刑事はさっそく上司に報告したのですが、なぜか「捜査打ち切り」を命じられました。時の内務大臣は山県直系の大浦兼武ですが、桂内閣が大変な時に、余計な波風は立てたくない。そんな政治判断だったのかも知れません。

ただ山県という人は「山県の耳」と云われたくらい、よく情報を集め、情報にも敏感な人です。当然大浦からこの話を聞いていたでしょうし、平沼騏一郎は「島田の政府攻撃は山県がやらせたのだ」と書いています。島田は若い頃、山県のお供をして二か月ほど北海道・東北の視察旅行をしたことがあり、それ以来の仲だと云うのです。当時陸軍大臣の秘書官をしていた荒木貞夫、後に陸軍大臣となる荒木も、「内閣を倒す倒閣資金は参謀本部の機密費から出た」と云っています。陸軍の師団増設要求はずっと凍結されているのに、海軍だけが軍艦を造っています。陸軍には不満がいっぱいでした。シーメンス事件の陰には、この陸海軍の仲の悪さ、長州と薩摩の対立があり、水面下では長州と陸軍による「権兵衛下ろし」が進んでいたのです。

島田は二十六日の予算総会で、「ヘルマンをゆすった通信員は、ロイター通信の記者プーレーだ」と暴露しました。そして「ここまで名前を挙げても、警視庁は捜査しないのか」と迫ったのです。恐喝事件のいきさつはこうです。リヒテルは最初ヘルマンを脅したのですが、拒絶されたためロイター通信に機密書類を売り込みました。ところが七百五十円でこの書類を買ったプーレーも、「ニュースにするよりはこれで一儲けを」と、ヘルマンに二十五万円とふっかけたのです。ヘルマンは少しは海軍で見て貰おうと思ったのか、海軍大臣の斎藤を訪ねましたが相手にされません。そこでヘルマンはプーレーと五万円で話をつけ、取り戻した書類を焼却した上で警視庁に「円満解決」と連絡したのです。これで一件落着の

はずでした。ところが端した金しか手に出来なかったリヒテルが、さらに欲をかいたことから事件は表面化することになりました。リヒテルは書類を写真に撮っていて、今度はそれでシーメンス本社をゆすって捕まり、皮肉にもその記事をロンドン特電として流したのが、プーレーの務めるロイター通信だったのです。

海軍もここまでくると放ってはおけません。一月二十八日海軍省に査問委員会を設置し、司法省に正式捜査を依頼しました。担当主任検事は三十七歳の小原直です。小原は後に司法大臣になり、今汚職摘発に活躍する東京地検特捜部の「育ての親」と云われた人です。特捜部が発足したのは昭和二十四年五月ですが、その前身は「隠退蔵事件捜査部」と云われるものです。敗戦のどさくさで政府や軍の関係者がたくさんの物資を隠しましたが、その隠匿物資の摘発に当たったのが、帳簿と金の流れを重視する小原の指導を受けた経済検事たちでした。戦後公安、思想関係の検事が数多く追放されたため、この経済検事が検察庁の主流となったのです。

捜査はプーレー、ヘルマンの逮捕で始まりましたが、ヘルマンは「書類は設計など技術的なもので、コミッションとは全く関係ない。海軍に迷惑をかけるといけないので焼いたまでだ」と言い張ります。小原検事の頭には前年の大正二年七月、海軍がシーメンスと、千葉県船橋の行田に建設契約を結んだばかりの無線電信所がありました。余談になりますが、昭和十六年十二月一日、御前会議で日米開戦が決まると、連合艦隊の旗艦長門は「新高山登レ一二〇八」、つまり「開戦の日は十二月八日東京時間午前零時」という有名な暗号電報を発信しました。それはこの船橋の高さ二百㍍の大鉄塔から、ハワイ真珠湾攻撃に向かう機動部隊など全艦隊に送信されたのです。

契約価格七十五万四千円。シーメンスの担当は吉田収吉という男で、艦政本部の窓口はシーメンス文書にも名前の出てくる沢崎大佐でした。頑強に否認する吉田に小原検事が突き付けたのが、銀行から押収した吉田の小切手帳の控えです。その控えには、「大正二年十月十五日、金二千円、渡先沢崎」と書いてあったのです。沢崎は可哀相な海軍士官でした。病気がちの妻と五人の子供を抱え、沢崎自身も結核に冒されていました。しかし休職になったら食べてはいけないと、それを秘して勤務を続けていたのです。二月八日に出頭を求められた沢崎は、観念していたのか、悪怯れずに一切を認めました。吉田の家は沢崎のすぐ近くです。一切出入り商人を近付けない沢崎に、吉田は子供同士が同じ小学校なのを利用して、まず沢崎の妻に近付きました。そして病気で寝ているその枕元に、「お子さんの養育費に役立ててほしい」と、現金の入った手提げ金庫を置いていったのです。帰宅して妻から話を聞いた沢崎は、それが賄賂だと知りながら、子供たちの将来を考え、ついついその金を銀行の定期預金にしてしまったと云うのです。収賄金額一万一千円。沢崎は海軍軍法会議に送られ、こうしてシーメンス事件の一

角が突破されました。

新聞は連日のように「薩摩海軍の腐敗」を非難し、子供たちの間では「コミッションごっこ」。こんな遊びが流行っていると伝えました。「松の皮喰う人、軍艦を喰う人」という漫画も載りました。貧苦にあえぐ庶民が松の皮をかじっているのに、でっぷり肥った海軍の軍人が、軍艦を手玉にとってかぶりついていると云うのです。それまで世論の風向きは、海軍には比較的暖かでした。日本海海戦大勝利の余韻もありましたし、移民問題や満州をめぐって日米摩擦が起きている時です。「アメリカに負けない大海軍を」といった国民的な気分もありました。ところがその軍艦で、海軍の軍人が私腹を肥やしている。しかも今年もまた一億五千四百万円の大予算とあって、民衆の怒りが一遍に爆発したのです。

二月十日。この日はちょうど一年前、桂内閣が国会を包囲した民衆によって総辞職に追い込まれた日です。立憲同志会、国民党など野党は、議会に山本内閣不信任案を提出したのです。野党議員はみんな、胸に白バラをつけて議場に入りました。一年前は、政友会の議員が「憲政擁護・閥族打破」を合い言葉に、桂内閣不信任決議案に賛成の白票を投ずる。その決意を示すための白バラでした。朝日新聞はトップ記事で、「宣戦の日」と書きました。「十年前の二月十日は、明治天皇がロシア帝国に宣戦布告をされた日だ。いまやこの日を以て、山本内閣に対する宣戦の烽火を挙げ、日比谷の原頭に国民大会を開き、さらに進んで国会に迫ろう」と書いたのです。

ただ桂内閣の時と違うのは、衆議院は与党政友会が絶対多数だったことです。不信任案が出されても、可決される心配は全くありません。内務大臣原敬の心配は、むしろ民衆の暴動でした。そこで前日陸軍と打ち合わせて、出兵要請をしたら、三、四十分で麻布の歩兵第三連隊がかけつける約束になっていたのです。ところが待てど暮らせど、その軍隊が一向にやって来ません。午後三時に不信任案を否決した時は、国会は三万の群衆に囲まれていました。それにしてもあの大正時代の群衆の熱気というのは、大変なものですね。誰かリーダーがいて号令をかけたわけでもないのに、これだけの群衆が集まってしまうのです。白バラをつけた野党議員が出てくると、割れんばかりの拍手喝采。政友会の議員には「殴ってしまえ」の罵声です。仕方なく原は議場脇の道路を警官隊に開かせ、やっと政友会の議員を脱出させたのですが、兵隊がラッパを吹きながらやって来たのは、出兵要請をしてから二時間半も経ってからでした。これも陸軍の海軍に対するいやがらせ、一種のサボタージュだったのでしょう。

実はシーメンス事件というのは、その奥にヴィッカースという巨大な造船会社が隠れている、「ヴィッカース事件」だったのです。日本海軍は日清戦争が終わると、ロシアとの戦いに備えて、戦艦六隻、一等巡洋艦六隻のいわゆる「六六艦隊」建造にかかりました。まだ自力で大きな軍艦を造る力がありませんから、全

て外国への発注です。推進したのは山本権兵衛で、財源は清国からの賠償金でした。ロシアなどの三国干渉で、泣く泣く旅順を清国に返した日本ですが、その際の還付金と合わせて三億六千万円。これをイギリス・ポンドで受け取って、ロンドンにプールし、戦艦三笠など外国で造った軍艦の支払いに当てたのです。日本が国産で戦艦を造るようになるのは、日露戦争の直前、横須賀や呉、佐世保などに海軍工廠が設置されてからです。

ところが日露戦争が終わった翌年の三十九年暮れ、イギリスが造った高速戦艦ドレッドノートの激震が日本海軍を襲いました。何しろドレッドノートは十二インチ砲十門、速力二十二ノットです。日本海海戦で活躍した三笠はおろか、日本海軍が最新鋭戦艦の積もりで造っていた薩摩、安芸、鞍馬も十二インチ砲四門、速力十八ノットでは、一夜にして旧式戦艦です。慌ててドレッドノートの頭文字をとった「弩級戦艦」河内の建造にかかりましたが、それが出来ないうちに、今度は一回り大きい十三・五インチ砲を積んだライオンの登場です。日本の体操が華やかな頃、難しい業を「超弩級の演技」と云いましたが、桁外れに物凄いことをそんな言葉で表現したほど、超弩級戦艦のショックは大きかったのです。

海軍は明治四十三年七月、八千二百万円の予算が認められると、超弩級戦艦五隻の建造にかかりました。一号艦金剛をイギリスに発注したのは、国内で建造する比叡など四隻に、その最新技術をフルに生かす狙いからです。そして金剛の競争入札に指定されたのが、イギリスのヴィッカースとアームストロングという二つの造船会社で、その受注獲得をめぐって、日本代理店の三井物産と高田商会が激烈な競争を展開したのです。ヴィッカースはそれまで、アームストロングに負け続けでした。アームストロングが十四隻も受注しているのに、ヴィッカースは三笠と香取の二隻だけです。そこでヴィッカース代理店の三井物産は、海軍ＯＢを技術顧問に迎え、首尾よく金剛受注に成功したのですが、実はその裏で莫大な金が動いていたのです。

小原検事の原宿の質素な住まいの裏には、藤井少将の豪壮な邸宅が建っていました。土地だけでも千二百坪、明石、大津には別荘を持っており、一台三千円もする自動車を乗り回しています。築地署の報告では、藤井はこの数か月間、料亭に入り浸りだと云います。しかも金剛建造中にイギリスに出張し、シーメンス文書にも「法外なコミッションを要求した」と名前の出てくる藤井は、捜査をシーメンスからヴィッカースへと伸ばす、重要なカギを握る人物でした。検事局に出頭を求められた藤井は、「私は海軍軍人だ。金品は一切受け取っていない」と大見得を切り、自動車も借り物だと主張します。ところが藤井の遠縁にあたる車の持ち主を追及すると、あっさり「名義を貸しただけで、車は藤井の物だ」と認めてしまったのです。しかも藤井から十七、八回に分けて現金を預かったが、余りに額が多いので、公債や株券にしてあると云います。何と六百二十一件、総額三

十万円を超えていました。

捜査はヴィッカースへ向けて急ピッチで進み、平沼検事総長は検事を指揮して軍港のある呉に向かいました。二月十八日朝、呉鎮守府司令長官松本和中将の官舎を家宅捜索したのです。直前まで軍艦建造の責任者、艦政本部長をしていた松本中将は四十万円を収賄していました。今なら二、三十億円でしょうか。田中角栄の五億円など、比べものにならない額です。全面否認をする関係者の口を開かせたのは、三井物産から押収した一冊の帳簿でした。小原検事は帳簿を見直しているうちに、「仮払金」の三文字が改竄されていることに気が付いたのです。帳簿係に確かめると、「貸付金」とあったのを書き直せと云われて、小刀で削ったといいます。しかし「貸付金」を「仮払金」にするのなら、最後の「金」の字まで削る必要はないわけです。別の字だったに違いない。「仮払金」の欄には鉛筆で書いて消した跡があり、それは片仮名のキでした。機密費だったのです。金剛は建造費二千三百六十万円、三井物産の代理店手数料が百十五万円。それにしても軍艦というものは金のかかるもので、手数料もベラ棒です。それだけ旨味があるということなのでしょうが、松本中将の成功報酬も奮発して三五%も払われていたのです。

疑獄事件には自殺がつきものです。シーメンス事件でも、吉田収吉が獄内で謎の首吊り自殺をしました。新聞は「これで捜査は終わり。海軍高官には安堵の胸を撫で下ろしている者が多いだろう」と書きましたが、すでに捜査の詰めは終わっていました。松本中将は軍法会議に送られて収監される時、人事局長の鈴木貫太郎に云ったそうです。「自分は周りの者から次の海軍大臣だとおだてられ、ついその気になった。ご承知の通り海軍には機密費が少なく、政界で思うように活躍できない。そこで大臣になった時のために、予め機密費を用意しておこうと思って収賄してしまった」。日露戦争という明治国家最大の国難を乗り切り、軍備を拡張し、組織が大きくなるにつれて、軍人の官僚化が始まっていました。出世競争に勝ち抜くには、軍人の世界にも「銭をほしがる」、卑しい根性が忍び寄っていたのです。

そのころの新聞記者は表現が端的で手厳しく、「人触れればこれを斬り、馬触れればこれを斬る感があった」と云います。まだ人権思想なんてない時代ですから、人権よりはまず不正糾弾でした。新聞は「山本権兵衛はイギリスのイングランド銀行に百万円預けている」と書き立てたのです。山本の家は、首相になっても客間一間だけという質素なもので、イングランド銀行も個人の金は一切預からない所です。根も葉もない噂話なのですが、こうした山本名指しの非難に活気づいたのが貴族院です。実は衆議院に強い山本内閣も、貴族院という弱点を抱えていました。ここは官僚出身の勅選議員が多く、いわば山県有朋の牙城なのです。しかも現在の参議院と違って、貴族院は衆議院と同等の力を持っていましたから予算はここを通らないと成立しません。政府は世論をなだめるため、大正三年度

予算から戦艦一隻分、三千万円を減らして衆議院を通過させたのですが、貴族院は強硬でした。村田保という貴族院議員は「国民は閣下を国賊と呼んでいる。監獄に行けば、閣下と同じ顔つきの者は沢山いると云っている」。こう云って山本の辞職を迫り、山本と刺し違えると云わんばかりに、議員を辞職してしまいました。そして貴族院も山本内閣打倒の決意を固め、海軍予算からさらに四千万円、合わせて七千万円の減額を可決したのです。

山本内閣は窮地に陥りました。内閣存続の唯一の道は、衆議院と貴族院の両院協議会で、貴族院の修正案を丸呑みすることです。しかしそれは、「衆議院を以て世論の府」と任ずる政友会にとって、政党の存立に関わることでした。両院から十人ずつ出た協議会は、議長が貴族院から出たため、十対九で衆議院の予算案が採決されてしまったのです。この時、山本内閣の命運は決まったと云ってもいいでしょう。三月二十三日、大正三年度予算案は貴族院本会議で再び否決され、山本内閣は翌日総辞職したのです。民衆の力で倒された桂内閣に代わって一年一か月、まるで桂太郎の亡霊が復讐したかのような、同じような最期でした。

外務大臣の牧野伸顕、維新の三傑大久保利通の次男で、吉田茂首相はこの人の娘婿ですが、牧野は議会から出てきた山本の目に、涙がいっぱいだったと云っています。「あの山本が涙を流したのを見たのは、私より他にいないだろう」と回顧録に書いていますが、さぞ残念だったのでしょう。山本内閣弾劾の先頭に立った尾崎行雄は、次の大隈重信内閣で司法大臣になりましたが、こう云っています。「桂太郎は自分の大喝一声に、顔面蒼白となった。しかし山本は憤然としてにらみ返してきた。敵ながら威風あたりを払って見えた。司法大臣になっていろいろ調べてみたが、世間が噂しているような、山本自身が収賄に関係していた証拠は一つも出てこなかった」。

五月十五日、沢崎大佐の懲役一年を皮切りに、次々と海軍軍法会議の判決が出ました。松本中将は懲役三年、藤井少将懲役四年六月でした。そして山本と斎藤は事件の責任を取らされる形で現役を退き、予備役になったのです。この事件がなければ、山本は間違いなく元帥、終身の海軍大将になっていたでしょう。そうすれば、生きている限り海軍に強い発言権があったわけで、山本が海軍に影響力を失ったことは、海軍だけではなく日本の大きな損失になりますが、十分ほど休憩してお話します。

×　　×

明治、大正の日本の海軍を引っ張ったのは、まず山本権兵衛、その後の海軍大臣斎藤實、そして日本海海戦の時の連合艦隊参謀長で、ワシントン軍縮条約を纏めた加藤友三郎の三人です。この三人に副官として身近に仕えた山梨勝之進は、こう云っています。「山本大将の前に立つと、燦々と輝く灼熱の太陽の前にある思いがする。加藤大将の前に立つと、何物をも一点の狂いもなく映し出す、鏡の

前に立った思いがする。斎藤大将と共にある時は、美しいサロンに座し、香り高いウィスキーを杯にくみ、静かに語る思いがする」。私の大好きな言葉で、これほど端的に、三人をよく言い表わした言葉はないでしょう。山梨は昭和五年のロンドン会議の時、海軍次官として軍縮条約締結に奔走し、「条約派」として海軍を追われた人です。昭和十四年から敗戦後の二十一年まで、学習院長として今の天皇の教育に当たりました。その後も四十二年に九十歳で亡くなる直前まで、海上自衛隊の幹部学校で講義を続け、その原稿は大学ノート四十冊にも及んだと云います。立派な軍人でした。こうした人が海軍を追われたところに、昭和の日本の大きな躓きがあったように思います。

その「灼熱の太陽」を戴いた山本内閣の業績は、大きく云って三つあります。まず、目に見えて大きかったのが行財政整理です。二番目が、西園寺内閣を倒した「陸海軍大臣現役武官制」から「現役」の二文字をとってしまい、第一線を退いた予備役や後備役の軍人でも、大将、中将でさえあれば、陸海軍大臣になれるようにしたことです。そして三番目が「文官任用令」といって、役人を採用する法律を改正したことでした。各省の次官や警視総監といった政府の主だったポストは、それまで高等文官試験、いまで云う上級職試験を通って、一定の経歴を持った者でないとなれませんでした。それをそうした資格がなくてもなれるように、高級役人になる道を広げたのです。

しかも山本が大変だったのは、どれか一つを片付けてからというのではなく、この三つを同時進行でやったことです。まさに山本の突進力でした。山本は毎日朝の散歩をすませると、午前九時かっきりに首相官邸に出ました。そして細大もらさず書類に目を通し、少しでも疑問があれば担当大臣を呼び出して詳しく質問します。大臣の方もいつ呼び出されるかわからないし、質問に答えられるように勉強もしておかなければなりませんから、ぼんやりしていられません。首相官邸がこんなに忙しい場所になったのは、初めてだと云われました。

行政整理も迅速果敢でした。山本は組閣一か月後には各省次官を集めて、内務大臣の原敬を責任者に指名し、整理断行を指示したのです。いつの世もそうですが、役所というものは組織が小さくなることには抵抗します。しかし山本は四月十四日から土曜、日曜を休んだだけで七日間連続、ぶっ通しの閣議を開いて次々と決めていったのです。例えば大蔵省の関税局と国債局を廃止して、主税局、理財局に吸収する。農商務省の商務局と工務局を合併して商工局にする。法律や勅令を新しく作ったり改正や廃止など百七十八件。高等文官試験を通った高等官、いまでいうキャリアを八百十八人、判任官といって大臣や知事の権限で採用出来る役人まで入れると、実に六千八百七十八人を整理したのです。これによる経費の節約は七千三十七万円、大正二年度予算だけでも六千六百万円です。

確かにプランは、ある程度西園寺内閣の時に出来ていました。しかしどの内閣

も、「必要だ、必要だ」と云いながら、実行出来なかったのです。原敬の政治力も大きかったが、やはり山本の実行力なしには出来なかったものでした。山本は言葉だけではなく、自ら先頭に立ったのです。どうも「会議は踊るで、実行サッパリ」の今の日本を見ると、改めてトップの指導力の大切さを痛感します。

実は山本はちょうど二十年前、階級は一介の海軍大佐でありながら、海軍改革にも大ナタを振るっているのです。明治二十六年に海軍省の官房主事、いまでいう官房長になった山本は、海軍大臣の西郷従道、この人は西郷隆盛の弟ですが、西郷にに迫って、将官八人を含む幹部九十七人の首切りを断行しています。会社の課長が、並み居る重役を首にしたようなものですから、「大佐大臣」、大佐のくせに大臣になった積もりで威張っているとか、「大佐暴君」とか云って非難ごうごうでした。しかも将官のほとんどは、山本と同じ薩摩出身の大先輩、明治維新の功労者ばかりです。太っ腹で知られるさすがの西郷もひるんだそうですが、山本は「功労者には勲章をやればよい。能力のない者を実務につけると百害を生む。いざ戦さになって勝てる海軍にするには、兵学校で基礎から教育を受けた、若い将校を第一線につけなければダメだ」。こう云って「薩摩の海軍」と云われた藩閥の壁を自ら破り、「日本の海軍」にしたのです。

山本は十二歳の時、薩摩とイギリスの戦争「薩英戦争」で、鹿児島がイギリス東洋艦隊の砲撃により火の海になるのを見ています。弾運びをした山本少年に強烈な衝撃を与えたのが、両軍の砲弾の違いでした。こっちの砲弾はタドンを丸めたようなもの。発射のたびに砲身をきれいに拭いて、大砲の先から砲弾込めるのですから、次の弾を撃つのに五分も六分もかかります。しかも一発撃つごとに、砲身がストン、ストンと後じさりしてしまって、元の位置に戻さないでおくと、発射不能になってしまいます。ところが向こうはアームストロング砲。砲弾の先が椎の実のように尖っていて、スピードも破壊力も段違いです。山本は刀と精神力では、新式兵器にかなわないことを肌で知ったのです。明治の軍人が偉かったのはこの点です。日本の弱さを十分知っていますから、新知識の吸収にも改革にも積極的だったのです。

海軍兵学校を卒業した山本は明治十年、ドイツの軍艦に乗り組んでヨーロッパから南米へと周り、一年半もドイツ士官と一緒に訓練に励んでいます。当時先進国の海軍で、これだけ実地に勉強をした海軍士官はいないでしょう。ところがその頃の日本の海軍は、幕府海軍から入った者、陸軍から移った者、各藩から飛び込んだ者もいるといった、雑多な寄り合い所帯です。豪傑は多いが、どんどん近代化されていく軍艦、兵器についていけません。しかも軍艦も貧弱でした。海軍の軍人をからかって、「君、定遠に勝てるかね」が流行り言葉だったそうです。明治十九年に清国の誇る七千四百トンの戦艦定遠、鎮遠が長崎に入港した時、清国水兵が乱暴狼藉をしても手が出せずに、一刻も早い出港を祈るだけでした。「長

崎事件」と云われるものですが、官房主事になった山本は、海軍の全面改革を決意したのです。

その中には、海軍の作戦を担当する軍令部の設置がありました。まだ海軍が小さくて、海軍の作戦機関は参謀本部の中にあったのです。それを独立させようと云うのですから、参謀本部を作った山県有朋が黙っていません。さっそく椿山荘に山本を呼び付けたのですが、九時間に及んだ会談が終わった時、総理大臣をして元老にもなっている山県が、わざわざ玄関まで見送りに出て、きちんと目礼して山本を送ったそうです。そして数日後の閣議で、「余りに世間の評判が悪いので山本を誤解していたが、信頼すべき海軍の軍人を発見した」。こう云って、「思慮綿密で、堅実、的確な人物」と激賞したと云うのです。やがて山県に対抗する大きな存在になっていく山本ですが、一見精悍で突進型に見えても、その実几帳面で用意周到、細心な人だったようです。山本の長男は「何をするにも決して無謀なことはせず、十分に研究に研究を重ね、いよいよ良いとなって初めて、それに向かって突進する人だった」と話しています。だからこそ、山県を心服させたのでしょう。

明治三十一年、四十六歳の若さで海軍大臣になった山本が、真っ先に訪ねたのが慶応義塾や時事新報の創設者である福沢諭吉です。山本は「六六艦隊」を造るには、どうしても言論界のバックアップが必要だと思ったのです。福沢は理路整然と説明する山本に、「あれは軍人ではなくて学者だ」と云ったそうです。そして福沢自ら先頭に立って、時事新報の紙面で海軍拡張の必要性を訴えたのです。

山本はまた、いかつい外見に似合わず、心の優しさを秘めた人でした。山本の奥さんは、新潟の漁村から品川の遊廓に売られてきた女性です。二十五歳の時、その十七歳の少女を見初めたのですが、山本は「君はこんな所にいる女性ではない」と、仲間の海軍士官の助けを借りてカッターを品川海岸に乗り付け、助け出したと云うのです。明治十一年、海軍中尉に昇進する時に結婚しましたが、こんな誓約書を交わしています。「夫婦は互いに礼儀を守ること、夫婦むつまじく互いに不和を生ぜざること」。新婚早々の奥さんを自分の乗っている軍艦に案内し、その姿は「後ろ指を者がいれば、許さんぞ」と云わんばかりだったそうです。フトンの上げ下ろしから部屋の掃除はもちろん、専用の針箱まで持っていて、靴下や洋服の繕いも自分でしたと云います。

家庭ではこんな、私たちの想像する「明治の男」とは全く違う一面を持っていた山本ですが、外では「えらそぶっている」。こう云われるほど、傲岸尊大でした。外国人が握手を求めても、山本はイスに座ったまま、悠然と手を差し伸べたと云います。人を人と思わないところがありましたから、山本が座っただけで、「座敷が敵味方に分かれた」。こう云われるくらい、敵の多い人でした。それでいて若くして海軍のリーダーになった山本が、しっかり海軍を統制出来たのは、

人を見る目が確かで、能力主義に徹したこと、人事が公平だったからでしょう。山本以後、薩摩出身で海軍大臣、軍令部長といった要職に就いたのは一人ずつです。海軍大将も、大将と云えば薩摩ばっかりだったのに、日露戦争の後からは五人しか出ていません。そして何よりも山本が優れていたのは、世界の動向を掌握する能力、識見に恵まれていたことだったと思います。

山本が実行した三つの改革の中で、もしそのまま続いていたら、日本の進路は変わっていたに違いない。そう思うのが、「陸海軍大臣現役武官制」を改正して、現役制度を廃止したことです。それは山本が一番苦労をし、また山本でなくては出来なかったものでした。なぜならこの制度は、陸軍の大御所山県有朋が作った制度なのです。それを改正するということは、長州と陸軍を相手に一戦交えることを意味していました。

話は明治三十一年にさかのぼります。憲政党の大隈重信内閣が出来た時、政党内閣の出現に「明治国家の落城」と嘆き、危機感を持ったのが山県です。山県は「政党は逆賊なり」、政党は反乱者だと云ったほど、政党嫌いの人です。ですから第二次山県内閣を組織すると、まず文官任用令を作りました。先程も話しましたように、高等文官試験などの枠をはめて、むやみやたらな者が官僚組織に入ってこないよう、政党員を締め出したのです。続いて三十三年五月に、陸海軍省の制度を改正しました。職員の定員を定めたものに、備考をたった一行ですが、ちょこっと付け加えたのです。「大臣及び次官に任ぜらるる者は現役将官を以てす」という一行です。職員表には大臣は大将、中将と規定してありますから、この一行を加えたことで、それまで大将、中将なら、一線を退いた予備、後備役でもよかったのが、現役でないと陸海軍大臣にはなれなくなりました。そして現役の軍人は常に陸海軍の総意をバックにしていますから、軍部の要求を入れない内閣には大臣を出さないぞと、この「現役」というたった二文字が、西園寺内閣を倒したわけです。

議会でこの問題を山本内閣にぶつけたのが、山本に反旗を翻して政友会を脱党した議員たちです。「現役武官制が立憲政治をやっていく上で、差し障りにならないか」と、山本に質問したのです。海軍大将でもある山本の一番答えにくい、痛い所をついたわけです。もともと現役武官制は、西園寺内閣を倒したにっくき制度ですから、その廃止は政友会のかねてからの主張でした。原敬も「脱党者を政友会に戻すには、廃止が絶対必要だ」と云います。山本は大正二年三月十一日の議会で、「いかにも現行制度は、憲政の運用上支障なきを保し難いのでございます。つきましては、政府は慎重審議を尽くし、相当の改正を実施することを期しております」。こう答弁して、支障があることを認め改正を約束したのです。

どちらかと云えば、与党政友会の顔を立てた感じですが、決断すると山本は早い人でした。「内閣の公約となった以上、これは内閣の進退に関わる問題だ」。

こう云う山本に、陸軍大臣の木越安綱も一度は同意しました。しかし陸軍省、参謀本部は挙って大反対です。木越は日清戦争の時、師団長・桂太郎の下で参謀長をして、その引き立てで桂内閣の陸軍大臣になり、山本内閣に留任した人です。ですから桂という後ろ盾がなくなれば、石川出身の木越は長州全盛の陸軍では外様の弱い立場でした。長州出身の参謀総長・長谷川好道大将に「絶対反対だ」と突き上げられ、再び態度を変えてしまったのです。

戦前、統帥権という大変やっかいなものがありました。軍隊の指揮命令権のことですが、ひとたび動き出すとこれには総理大臣といえども口出し出来ません。山本はこの統帥権を逆手にとったのです。長谷川参謀総長を呼ぶと、「制度の改正は政府の所管事項であって、統帥権に関することではない」。それを確かめた上で、「それなのに参謀総長が反対するのはなぜか」と尋ねたのです。面と向かって理詰めで迫られては、長谷川も引き下がるしかありません。「おやりになると云うなら、おやりになったらいいでしょう」と捨て台詞を吐くと、山本はすかさず「総長は憲法の精神をよく理解しておられる」と長谷川を持ち上げ、その目の前で陸軍大臣木越の同意を取り付けたのです。それでも長谷川はあきらめずに、葉山のご用邸に二度も出向きました。天皇の詔勅で改正をやめさせようとしたのですが、大正天皇は許されませんでした。

この時陸軍省が閣議に提出した制度改正案が、今でも防衛庁に残っているのだそうです。それは自分の所で出しておきながら、改正案の文案を書いた軍務局長自身が、「本案に不賛成なれども、特に大臣の命により提出す」。つまり反対なのだが、大臣の命令だから仕方なく出すと云うもので、課長クラス全員の反対意見を書いた付箋、紙切れが一杯ついているのだそうです。陸軍大臣の木越は、部下が総反対し、参謀本部の同意も得られないまま、「大臣決済」の判を捺したわのです。

こうして制度改正は五月二日、閣議決定されましたが、まだ難関が残っていました。枢密院です。条約とか勅令といった国の重要事項は、必ずここで審議する天皇の最高諮問機関です。顧問官には山県直系の官僚出身者が多く、しかも枢密院議長は山県なのです。山県という人は実に抜かりないと思うのですが、自分の作った制度が簡単にいじられたりしないよう、制度の改正には「枢密院の審議が必要」という歯止めをかけていました。追い詰められた陸軍は、この枢密院で改正案を一挙に潰そうととしたのです。

五月二十九日の枢密院会議に照準を合わせたように、改正反対の怪文書がばらまかれました。書いたのは、後に陸軍大臣になる陸軍省軍事課長の宇垣一成大佐で、勿論匿名です。「陸軍省官制に関する研究」と題した三十頁のパンフレットは、第一に現役以外の者が大臣になれば、軍人の中に党派が生まれ、軍隊が政治の渦中に巻き込まれる。明治天皇は軍人勅諭で「軍人は政治に拘るべからず」と

諭されている。軍人は超然と世論の外に立っているべきだ。第二に予備、後備役の軍人はうんと年をとった者か、軍人としては無能力者だ。そんな者が大臣になれば、軍事上の発展は期待できない、と云うのです。このパンフレットは、桂太郎と親しかった徳富蘇峰の国民新聞で四千部印刷され、枢密顧問官や陸海軍の軍人に送られました。

しかし山本はひるみません。枢密院会議には、枢密顧問官の定員三十八を二十四人に減らす案も出していたのです。ぐずぐす云うなら、「顧問官を代えてしまうぞ」といわんばかりです。この辺が山本の迫力でしょう。顧問官の任免権は首相が握っています。功なり名を遂げて、いわば最高の名誉職である顧問官を追われれば、ただの人になってしまいます。山県は病気を理由に会議を欠席し、山本との直接対決を避けました。そして山本の強硬姿勢にたじろいだ枢密院も、原案通り改正案を可決したのです。こうして六月十三日、勅令で「現役」と云う二文字が削除されました。その日山本は新聞記者を首相官邸の晩餐会に招待し、その席で行政整理の内容も発表しました。山本は自信満々でしたし、どの新聞も二ページの大特集を組んで、あの頃の新聞はページ数が少ないですから、こんなことは滅多にないことでしたが、新聞も拍手を送ったのです。

陸軍大臣の木越が辞職したのは、十日ほどしてからでした。長州閥に追い出されたのです。そのころ陸軍軍務局長の田中義一少将、後に陸軍大臣から首相になる田中は、長州の先輩、朝鮮総督の寺内正毅大将にこんな手紙を送っています。「陸軍大臣が山本のアゴのままに使われ、陸軍を破壊してでも内閣を助けようとしている」。口を極めて木越を非難し、大臣更迭までほのめかしているのです。長州閥にこうまで憎まれては、木越がノイローゼになるのも無理はありません。幹部がほとんど長州で占められている陸軍では、長州の意志に反しては陸軍大臣は務まらないし、陸軍下剋上の始まりでもありました。

陸軍には「三長官一体」という原則がありました。軍の行政を担当する陸軍大臣、作戦機関の責任者である参謀総長、士官学校など教育を担当する教育総監。陸軍の重要な事はこの三長官が協議して決めるというもので、この現役制が廃止になった時に作られた規定なのです。現役でない者が大臣になっても、勝手なことはさせない。つまり参謀総長と教育総監は現役ですから、万一の時は二対一で拒否するといった「縛り」をかけたもので、陸軍のショックのほどが分かります。実はこの時、陸軍大臣と参謀総長の業務分担も変更しているのです。それまで陸軍大臣が主管してきた業務の多くを、参謀総長に移管してしまいました。主管と云うのは起案権、方針案の作成権を意味し、しかも陸軍トップの大臣が起案するのですから、実際には最終決定権に他なりません。それを参謀総長に移管したと云うのは、現役でない者が大臣になっても統帥事項に影響が出ないように、統帥権の独立を制度的に強化しておいたのです。

それにしても宇垣の怪文書は、本人が軍人勅諭まで持ち出して戒めた軍人の政治関与であり、陸軍刑法に触れる政治活動でした。陸軍刑法第百三条では、軍人が「政治に関し、演説もしくは文書を以て意見を公にすること」を禁じており、明らかに軍法会議の対象になる行為なのです。宇垣は「憂国の至情、国家の前途を憂える気持ちから、ばれたら軍法会議も覚悟でやったのだ」と云っています。しかし陸軍は宇垣をかばって表沙汰にはせず、名古屋の連隊長に転出させただけでした。陸軍刑法を冒しても、軍部に都合のよいことなら処罰されない。陸軍専横、身勝手な論理の始まりでした。そして「憂国の至情」という言葉は、やがて五・一五事件、二・二六事件と、軍人のテロのたびに、その口実になっていきます。

田中義一が山本内閣を倒すために、早稲田の大隈重信担ぎ出しを画策したのもこの頃です。大正政変の最中、桂太郎の作った新党・立憲同志会は、国民党から四十六人が参加しただけで、総数九十人と思ったほど人が集まりませんでした。これを政友会に対抗する勢力にするには、陸軍と長州の援助が必要だと、朝鮮総督の寺内に進言しています。そして過渡期の便法として、大隈を同志会の総裁にしたらどうかと云うのです。大隈は、国民党のリーダーである犬養毅のお師匠さんとも云うべき人です。若い頃新聞記者をしていた犬養を、福沢諭吉の推薦で明治政府の役人に登用したのは、当時参議をしていた大隈でした。その大隈が明治十四年の政変で参議の地位を追われると、犬養も大隈に殉じて役人をやめ、大隈の作った政党に参加して、その参謀格になったのです。

こういう極めて密接なつながりのある二人ですが、犬養にとって立憲同志会は国民党を分裂させた憎むべき敵でした。そこで大隈を同志会総裁にして犬養を抱き込み、強力な野党連合を作ろうというのですが、全く軍人勅諭そっちのけの政治関与です。この山本内閣の後、大隈が首相となるレールは、この時すでに敷かれていたことになります。いずれにしても陸軍と長州が、あの手この手で山本内閣打倒を模索している時に、シーメンス事件が起こったのですから、小躍りしたわけです。そしてこの事件が「長州の陰謀だ」、「陸軍の報復だ」と云われるのも、こんな背景があったからなのです。

山本の廃止した現役制が、日本の政治にどんな大きな意味を持っていたのか。「因果はめぐる」と云いますが、それは二十三年後、他ならぬ宇垣一成によって証明されることになります。昭和十二年一月二十四日、朝鮮総督を辞任して伊豆長岡で静養していた宇垣は、深夜の京浜国道を東京へ向かっていました。宇垣に組閣の大命が下ったのです。ところが六郷橋のたもとで車を停められ、乗り込んできた憲兵司令官が陸軍大臣寺内寿一の伝言を伝えました。寺内正毅の長男ですが、「軍の若い者が騒いでいて容易ならぬ情勢だから、組閣の大命を辞退してほしい」と云う伝言です。陸軍始まって以来の反乱事件、二・二六事件の翌年のことです。宇垣はそのまま参内して組閣の大命を受けましたが、結局宇垣内閣は出

来ませんでした。陸軍の三長官会議で三人の大臣候補を挙げて交渉したが、みんな「自信がない」と辞退し、陸軍には「他に推薦する人物がいない」と云うのです。五代の内閣で陸軍大臣を務め、「宇垣時代」と云われたほど陸軍に君臨してきた宇垣も、陸軍大臣を得られないまま組閣を断念するしかありませんでした。宇垣が怪文書まで流して、あれほど守ろうとした現役武官制が、前年の五月に復活していて、また現役でないと陸軍大臣にはなれなくなっていたのです。もっとも宇垣本人は、この時はかねてからの主張ですから「誠に結構至極である」と手放しで喜んでいたくらいでした。ところが予備役、後備役から大臣を選ぶ道がなくなり、皮肉にもそれが宇垣の首を絞める結果になったのです。

現役制が二十三年ぶりに復活したのは、この二・二六事件の後の広田弘毅内閣の時です。広田については、城山三郎さんの「落日燃ゆ」という作品があります。東京裁判で死刑になった七人の中で、広田はただ一人外交官出身の文官でした。奥さんは裁判が始まると、夫の足手纏いにならないよう覚悟の自決をしており、法廷二階の記者席には、いつも二人のお嬢さんがひっそりと姿を見せていて、同情を誘いました。しかし、支那事変から太平洋戦争へと戦争に突入したその後の日本を考える時、私は陸軍の暴走を食い止めるチャンスは、この広田内閣の時しかなかったように思うのです。

広田の組閣構想が新聞に出ると、すぐイチャモンをつけたのが陸軍でした。外務大臣の吉田茂、広田と外務省同期で戦後首相になる吉田は、重臣牧野伸顕の娘婿であり自由主義者だ。司法大臣の小原直、シーメンス事件で活躍した小原は、美濃部達吉の天皇機関説に理解を示している。それに小原は二・二六事件で、北一輝など民間人を軍法会議にかけることに反対していて、それも陸軍から嫌われました。陸軍は五人の入閣候補者をダメだとした上で、「これは全軍一致の要望である」と声明を出したのです。二・二六事件を起こしたばかりの陸軍です。昭和天皇から厳しく「粛軍」、軍紀を粛正して衿を正せと注意されたばかりの陸軍が、公然と政治に介入してきたのです。広田は組閣の大命を辞退してでも抵抗すべきだったし、「粛軍第一の時に何事だ」と、大声をあげて陸軍を非難すべきでした。世情騒然としている混乱の時です。広田には一刻も早く組閣して、人心を安定させたい。その気持ちが強かったのかも知れません。あるいは軍刀をじゃらつかせて、威嚇する陸軍が怖かったのかも知れません。しかし外相時代から何度も陸軍に煮え湯を飲まされ、「陸軍にはどうにも困ったものだ」と憤慨していた広田が、一番かんじんな場面で、「軍の総意」という言葉に政治介入を許してしまったことが、日本にとって大きな躓きになりました。

陸軍は、反乱を起こした皇道派の青年将校たちが担いだ真崎甚三郎、荒木貞夫など、七人の大将を予備役にして、形ばかりの粛軍をしました。しかし次に出してきたのが、現役武官制の復活だったのです。「いまのように予備役、後備役で

もいい制度にしておくと、真崎や荒木などが大臣になって、再び軍の中に派閥争いが起こるかも知れない。それでは粛軍を徹底出来ない」と云うのです。粛軍を逆に利用したのですが、閣議では反対らしい反対もなく、簡単に認めてしまいました。確かに現役制が廃止されてから二十三年間、現実には一人も予備役、後備役の大臣は出ていません。組閣の段階で陸軍に屈した広田にとって、それほどのことではないと思ったのかも知れません。しかし大臣の道を、予備、後備にまで広げてあったからこそ、陸軍が大臣を出さないことで政治に横車を押すことが出来なかったのです。現役武官制の復活は「宇垣内閣流産」という形で姿を現わし、陸軍大臣を推薦する代わりに、内閣にあれこれ注文をつけることも可能になりました。陸軍大臣が辞職すると云えば、内閣は即日崩壊するしかないのです。この現役制こそ、戦争につながる軍部独裁の「伝家の宝刀」だったのです。

宇垣一成とは、一体どういう人だったのでしょう。写真を見ても、いかにも負けん気の強そうな顔つきですが、この老将軍が昭和二十八年の参議院選挙で、五十一万票も集めて当選した時は、誰もがびっくりしました。宇垣は岡山県出身。陸軍中尉の時、「精神一到何事か成らざらん」と、杢次というちょっとやぼったい名前を、一成に改めたのだそうです。ところが、「日本一に成るのを目指したのだ」と云われるくらい、若い頃から野心に燃えた軍人でした。宇垣には「単なる野心家だ」「いや力量、識見あふれる実力者だ」と、全く相反する評価があります。早くから「政界の惑星」と騒がれ、「宇垣なら」といった待望論が強かったのも確かです。宇垣が組閣に苦しんでいる時、「もう一息だ」「頑張って」といった激励電報が、毎日何千通と組閣本部に殺到したそうです。それは年々重苦しさを加えてきた軍部に対する国民の反感、「宇垣に何とかしてほしい」という、国民の気持ちの表れだったのだと思います。

五日後に宇垣内閣が潰れた時、作家の獅子文六は「宇垣がああいうことになって、どうにもならないムシャクシャが、晩酌を一本追加させ、女房に小言を云って、寝床にモグリ込む晩を続かせた」。こんなことを書いていますし、満州事変の時の首相若槻礼次郎も、宇垣を高く買っている一人です。「満州事変の時、陸軍大臣の南次郎は政府の不拡大方針を出先に押し通すことが出来ず、てんで物にならなかった。宇垣がいてくれたら、十分睨みをきかせることも出来たろうに」と残念がっています。宇垣内閣反対は満州事変を起こした石原莞爾、この時は参謀本部の作戦課長でしたが、石原など陸軍省、参謀本部の中堅幹部の突き上げでした。「宇垣は派閥のボスだ」「軍備の充実が大切な時に、宇垣は軍縮をやった男だ」と云うのですが、本音は力のある宇垣に出てこられたら困る。すでに陸軍を動かしている中堅幹部が、自分たちの進めている国防国家づくりが、やりにくくなる、と云うことだったのです。

もし宇垣内閣が出来ていたら、その年、つまり昭和十二年の支那事変は起こら

なかったろう、と云う人がいます。そうすれば、太平洋戦争へもつながらなかったわけですが、正直云って分かりません。しかし同じような「もし」を考えさせるのが、シーメンス事件で倒れた山本内閣です。もし山本政権が続いていたら、恐らく大隈重信内閣、寺内正毅内閣はなく、原敬の政党内閣にすんなりと移行していたでしょう。そうすれば、第一次世界大戦での日本の対応も変わっていたでしょうし、日本の政党政治も、もっとシンのしっかりしていたものなっていたでしょう。そして何よりも残念なのは、山本権兵衛がこの事件で海軍を追われたことでした。

山本という人は、常にまず海軍を見ました。しかし同時に、一段と高い所から見ることを忘れなかった人です。山本は「六六艦隊」を造った時、戦艦六隻を全てイギリスに発注しています。もちろんイギリスが世界一の海軍国で、技術的に優れていることもありましたが、それ以上に、万一ロシアとの戦争になったら、イギリスを味方につける。そう云う計算を山本はしていたのです。ロシアがヨーロッパから極東に艦隊を持ってこようとすれば、大きな軍艦は水深の浅いスエズ運河を通れませんから、南アフリカの喜望峰回りになります。この海域はイギリスの勢力圏です。イギリスが日本に好意的な中立を守れば、ロシア艦隊は石炭の補給、軍艦の修理に困るだろう。事実日露戦争でバルチック艦隊は山本の読み通りになり、対馬海峡にやってくる前に疲れ切ってしまうのですが、山本は三十五年一月の日英同盟締結につながる布石を、この時から打っていたのです。

日露戦争の直前、南満州のロシア軍が韓国領内にまで侵入し、陣地を築き始めました。山県有朋は閣議で、韓国に二個師団派遣を強硬に主張しましたが、山本はこう云って反対したのです。「韓国は弱小国とはいえ独立国です。そこに軍隊を送れば、日本は国際法違反で列国の非難を受けるでしょう。国際法規を守ってこそ、日本の立場が貫けるのです」。御前会議で日露開戦が決まると、山本は各艦隊司令長官に大臣訓示を打電させました。電文にはこうあります。「わが軍隊の行動は、常に人道を逸するがごときことなく、終始名誉ある文明の代表者として恥ずるところなきを期せられんこと、本大臣の切に望むところなり」。いいですね。海軍大臣が、開戦に当たって「勇戦奮闘を望む」ではなく、「人道をはずすな、文明の代表者として恥ずかしくない行動をとれ」。山本は、軍人だけの狭い立場にとらわれず、常に大きく世界を見ている人でした。

海軍の軍縮条約については、いずれ詳しくお話しますが、巡洋艦などの比率を決めた昭和五年のロンドン軍縮会議の時、これだけの見識を備え、常に世界を見た山本が元帥になっていて、発言権があったらなと惜しまれます。そうすれば海軍省と軍令部、条約派と艦隊派に分かれるといった、海軍の分裂はなかったでしょう。大正十一年のワシントン会議の時、戦艦の比率を五・五・三、アメリカ、イギリスの五に対して日本は三と決めた時には加藤友三郎が健在で、海軍大臣、

会議の首席全権としてしっかり睨みをきかせていました。しかしロンドン会議の時には、海軍を統制出来る人がいなくなっていたのです。条約締結に奔走した海軍次官の山梨勝之進、山本を「灼熱の太陽」といった山梨など、多くの良識派の人材が海軍を追われていきました。若槻礼次郎が山梨に「あなたは大臣、連合艦隊司令長官に当然なるべき人なのに」と気の毒がると、山梨は云ったそうです。「軍縮のような大問題は、犠牲なしには決まりません。自分がその犠牲になる積もりでやったのですから、少しも残念とは思っていません」。実に惜しい人でした。シーメンス事件は海軍から山本を奪い、また目に見えない大きな躓きを日本に与えたのです。

山本権兵衛は昭和八年に亡くなりました。皇室から贈られた誄詞、生前の功績を讃えた言葉には、「炯眼人を知り克く任じ、豪胆事に当たりて善く断ず」とありました。まさに山本を送るにふさわしい言葉だったと思います。